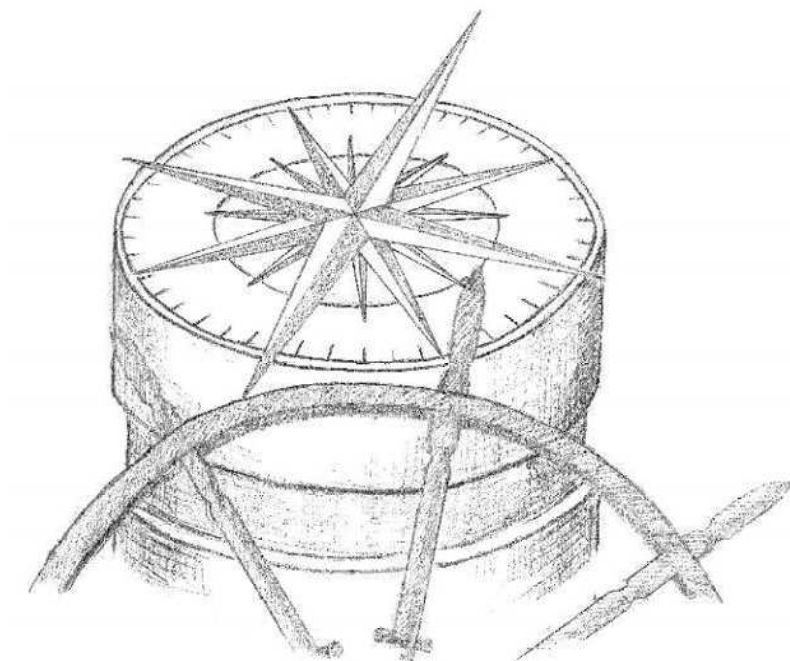


平成28年度

鹿児島学習定着度調査結果報告書

(平成29年1月調査)

～調査結果を生かした授業改善の手引～



(表紙絵差替__原稿執筆中)

平成29年3月



鹿児島県教育委員会

目 次

I	調査の概要	1
II	本調査の活用の仕方	3
III	各教科の結果	
1	各教科の全体平均通過率	5
2	各教科の結果概要	6
3	各教科の平均通過率と受検者の正答数分布	
(1)	国語	8
(2)	社会	11
(3)	算数・数学	14
(4)	理科	17
(5)	英語	20
4	各設問の分類と平均通過率	
(1)	国語	22
(2)	社会	25
(3)	算数・数学	28
(4)	理科	31
(5)	英語	34
5	地区別の平均通過率	36
6	各教科の授業改善の視点	
(1)	国語	37
(2)	社会	38
(3)	算数・数学	39
(4)	理科	40
(5)	英語	41
IV	児童生徒質問紙の結果概要	42
V	参考資料	
	○ 県全体の小問別の正答数・誤答数・無答数	

I 調査の概要

1 趣旨・目的

学習指導要領において身に付けることが求められている基礎的・基本的な知識・技能や思考力・判断力・表現力等に関する学力状況を把握するとともに、児童生徒の学習に関する意識や学び方などの学習状況を把握する。

また、各学校に全県的な傾向との比較・分析などを通じて、自校の課題を明確にさせ、問題解決的な学習活動を取り入れるなど教員の指導法改善を図るとともに、児童生徒の学力向上を図る。

2 調査の対象学年、学級等

- (1) 県内すべての公立小学校第5学年、中学校第1，2学年の全学級の児童生徒を調査対象とする。ただし、複式学級を有する学校においては、履修していない内容を調査から除外して実施する。なお、小・中学校における特別支援学級の児童生徒については、該当学年の学習内容を履修していない教科・内容を調査から除外して実施する。
- (2) 特別支援学校においては、該当学年の学習内容を履修している児童生徒を調査対象とする。

学校種	学年	実施校	調査児童生徒数
小学校(小学部)	第5学年	509校	13,812人
中学校(中学部)	第1学年	221校	13,247人
	第2学年	219校	13,096人

* 調査対象学年に在籍者がいない学校は除く。

* 調査人数は、欠席等により各教科、設問によって異なる。(上記は最大値を示す。)

3 調査の内容

学力調査

主として「基礎・基本」に関する内容と主として「思考・表現」に関する内容で出題し、調査対象教科の学力の定着状況(当該学年の12月終了程度までを範囲とする)について調査する。調査対象教科は以下のとおりである。

【小学校(小学部)】 第5学年 …… 国語，社会，算数，理科

【中学校(中学部)】 第1，2学年 …… 国語，社会，数学，理科，英語

学習状況調査

質問紙により、調査対象者の学習に関する意識や学び方などの学習状況について調査する。

4 調査の実施時間

学力調査

小学校(小学部) 45分(調査票の配布・説明等5分，調査時間40分)

中学校(中学部) 50分(調査票の配布・説明等5分，調査時間45分)

学習状況調査

小・中学校(小・中学部) 15分(調査票の配布・説明等5分，調査時間10分)

5 調査の実施日

学力調査 平成29年1月18日(水)・19日(木)

学習状況調査 平成29年1月18日(水)～20日(金)

6 調査の採点及び結果の集計・分析

- (1) 各学校は、自校の児童生徒の調査について採点・集計を行い、当該市町村教育委員会へ報告する。また、集計結果をかがしま学力向上支援Webシステムに登録する。自校の調査結果については、保護者に対して説明責任を果たすと同時に、かがしま学力向上支援Webシステムの速報結果も参考にしながら、今後の指導方法や学び方の改善に生かす。
- (2) 各市町村教育委員会は、管下の学校の調査結果を集計し、県教育委員会へ報告する。自市町村の調査結果については、かがしま学力向上支援Webシステムの速報結果も参考にしながら、自市町村の学力向上や指導法改善への取組に生かす。
- (3) 県教育委員会は、調査結果を集計・分析し、県全体の学力の定着状況について公表するとともに、指導方法の工夫改善の参考となる資料を作成し、各学校に配布することにより、各学校の学力向上への取組を支援する。

7 学力調査の問題内容（思考・表現）

鹿児島学習定着度調査は、次の2つの内容で出題している。

- ① 主として「基礎・基本」に関する問題
- ② 主として「思考・表現」に関する問題

②の問題は、各教科、次の内容を問うものとする。

教科名	番号	主として「思考・表現」に関する問題の内容
国語	1	知識・技能等を実生活の様々な場面に活用して課題解決する問題
	2	身近な資料を用いて、表現の仕方や文章の特徴を捉え、自分の表現に役立てることができるようにする問題
	3	複数の情報を関連付け、それをもとに自分の考えを論理的に書くことができるようにする問題
社会	1	社会的事象の特徴や背景・原因等について、自分の考えを筋道立てて説明する問題
	2	提示された資料を関連付けたり、比較したりして読み取ったことをもとに、社会的事象について説明する問題
	3	歴史的事象の相互の関係を判断したり、社会的事象について正しく説明しているものを判断したりする問題（選択肢による出題）
算数・数学	1	知識・技能等を実生活の様々な場面に活用して課題解決する問題
	2	示された課題解決の過程を、新たな課題に活用して解決する問題
	3	課題解決の方法や判断の根拠などを言葉や数、図、式、表、グラフなどを用いて、筋道立てて説明する問題
理科	1	観察、実験の結果（事実、データ）から結論を考察する問題
	2	原理、法則を他の身近な現象に当てはめて説明する問題
	3	視覚的に実感しにくい現象をモデルで説明する問題
英語	1	「聞くこと」においては、聞き取った英語を基に、英文を完成させたり、英語の質問文に英語で答えたりする問題
	2	「読むこと」においては、文と文のつながりや段落と段落の関係、内容に合う英文選択などを問う問題
	3	「書くこと」においては、対話文の流れを把握した上で、適切な英文や内容的にまとまりのある英文を書く問題

○ 各教科の「各設問の分類と平均通過率」の「思考・表現」の欄に番号が記載されている。

II 本調査の活用の仕方

- (1) 各教科で出題されている問題の内容や平均通過率について、本調査の設定通過率（基礎・基本8割、思考・表現5割）や学校で想定する平均通過率を意識して、学校全体で確認する。
- (2) 自校の平均通過率の高かった問題や低かった問題、県平均通過率との差が大きかった問題等について、成果や課題を明らかにする。その上で、これまでの指導法を振り返りつつ、今後どのような指導法が成果を更に伸ばし、課題克服につながるのか、校内で情報を共有する。
- (3) 本調査は単に該当する学年の状況のみを問うものではないため、校内で指導法を共有する際には、学年・教科を超えて全体で共有する。特に、学校全体で課題として共有することについては、各教科等の年間指導計画の中に重点事項としての取組内容等を朱書きする。

1 自校結果の把握

- 全体として各教科バランスよく学力が定着しているのかを確認するため、設定通過率（基礎・基本8割、思考・表現5割）や県全体の平均通過率との比較を行う。
- 学習状況についても児童生徒質問紙の結果を生かして、指導法の改善や学習習慣の確立に取り組む。
- 各教科の単元ごとの学力が定着しているのか確認するため、小問ごとの通過率を確認する。「4 各設問の分類と平均通過率」(p.22)には、自校結果を記入するための欄を設けているので、コピーし、校内研修等で各教員が記入して活用することも有効である。
- 各教科の内容・領域別平均正答率や観点別平均正答率に自校の特徴や課題がないのか検討する。
- 自校結果の把握に当たっては、単に平均通過率だけの把握にとどまることなく、児童生徒の誤答傾向に着目し、分析していくことが、指導法改善には有効である。

2 自校結果の活用

- 自校の結果についてその特徴を明らかにしたら、その要因を把握する。その上で、これまでの指導法を振り返りつつ、今後どのような指導法が成果を更に伸ばし、課題克服につながるのか、校内で情報を共有する。
- 成果の上がっている学校について、市町村教育委員会等と連携を図り、授業参観を行ったり、その学校の取組を学び、児童生徒の実態に合わせて自校化する。
- 成果の上がっている取組については、学校全体で情報を共有し、これからも継続して学校全体で取り組む。
- 改善を要する取組については、その方法をできるだけ具体的に示す。また、その取組については、いつ、どの単元の中で指導するのか具体的に年間指導計画の中に朱書きして、今後の取組を行う。
- 改善策を策定する際には、併せて評価の計画も立て、指導の結果の振り返りを行う。
- 課題となっていることについては、当該単元での指導だけでなく、必要に応じて学年を超えて定着の確認をしたり、補充指導をしたりするなど学校全体（教科全体）での取組を行う。
- 学校全体の分析と同様に、児童生徒一人一人について調査結果からうかがえる児童生徒の実態を把握し、再指導を実施する。
- 今後も課題が継続する内容、領域等について重点課題として取組を行うので、「6 重点課題の取組を生かした授業改善の視点」(p.37)を参考にしたり、「かごしま学力向上支援Webシステム」に掲載されている評価問題を単元末等に活用し、学習の定着を確認することも有効である。

4 本調査結果を生かした年間指導計画例

理科年間指導計画 第5学年

〇〇小学校

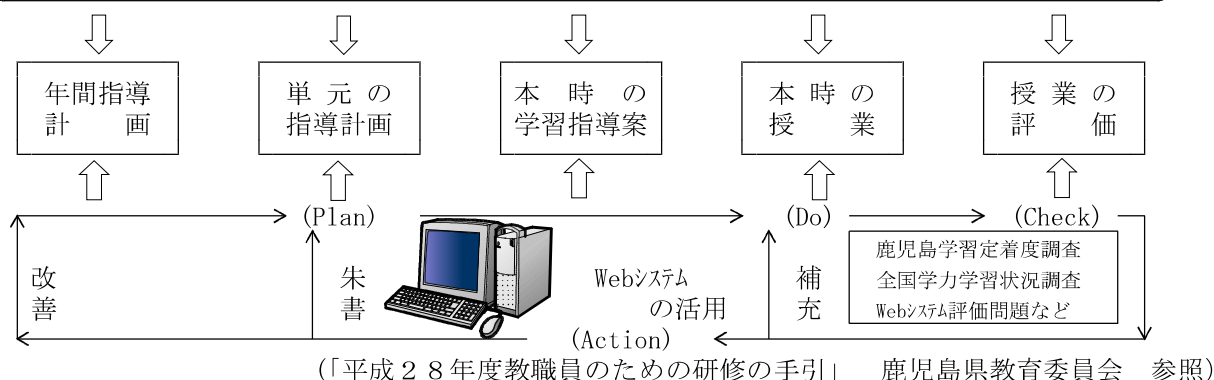
※ 指導計画に自校の平均通過率、県平均との差、指導の重点を朱書きしたもの。〔 〕は取組内容。

月	単元名・時数	時数	主な学習活動
4	1 天気の変化 8(9)	1	これまでの経験などから、雲と天気の変化について話し合う。
11	7 物のとけ方 15(16)	1	食塩を水に入れ、食塩が溶ける様子を観察して、気づいたことを話し合い、水溶液について知る。
		1(2)	食塩は、水に溶けると重さがどうなるかを調べ、まとめる。(実験①) ※【H28定着度調査】の課題：「水溶液を粒子モデルで表現する」 69.3%(-4.7%)【思考させ、教科書の図に粒子モデルを書かせる。】
		2	食塩とミョウバンが水に溶ける量には限りがあるかを調べ、まとめる。(実験②)(巻末基礎操作) ※【H27全国学調】【H28定着度調査】の課題：「マシリンダーの使い方」 55.5%(-4.7%) 56.0%(-6.2%)【基礎操作の理解、パフォーマンス】
		2	食塩とミョウバンをもっとたくさん溶かす方法について話し合い、水の量を変えて、食塩とミョウバンの溶ける量を調べる。(実験③)
12		2	水の温度を変えて、食塩とミョウバンの溶ける量を調べる。(実験④)
		2	更に水の温度を上げて、食塩とミョウバンの溶ける量を調べる。(実験⑤)
		2	水溶液を冷やすと溶けていた物を取り出すことができるかを調べて、まとめる。(実験⑥)
		2	水溶液を熱して水を蒸発させると溶けていた物を取り出すことができるかを調べて、まとめる。(実験⑦) ※【H27定着度調査】の課題：「食塩水が減ると食塩が出てくる理由」 32.4%(-8.5%)【自分の考えを書かせ、グループで練り合わせる。】
1	8 人のたんじょう 5(6)	1	人の母体内での子どもの成長を想像して、疑問を話し合い、調べることを決める。
		3	人の母体内での子どもの成長を調べる方法を考え、計画する。 人の母体内での子どもの成長を、資料などで調べる。(調査①)
		1(2)	人の母体内での子どもの成長について、調べたことを発表する。 人の母体内での子どもの成長変化についてまとめる。

【指導計画見直しのサイクル】

よりよい授業を構想するためには、実践に基づいた指導計画を立てる必要がある。また、指導計画は授業を行った後に適切な評価を行うなどして、改善していかなければならない。そのためには、「計画(Plan)」「年間指導計画、単元の指導計画・評価計画、1単位時間の指導計画・評価計画」—「実施(Do)」「本時の授業」—「評価(Check)」「授業の評価」—「改善(Action)」「計画の見直し」のサイクルを下図のように繰り返しながら、絶えず見直し、改善していくことが大切である(評価の際に本調査の積極的な活用を図る)。

- ① 指導目標の深い理解(学習指導要領及び学習指導要領解説の熟読、学校教育目標の理解)
- ② 学校、児童生徒等の実態や課題の把握(各種学力調査、自校での評価資料)
- ③ ①、②を踏まえ、それを実現するための手法(教材研究、教材開発、指導法研究等)



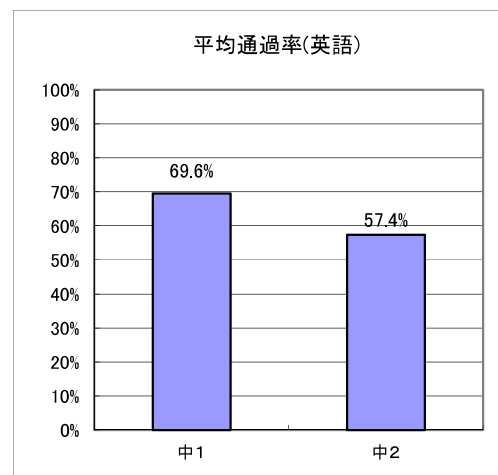
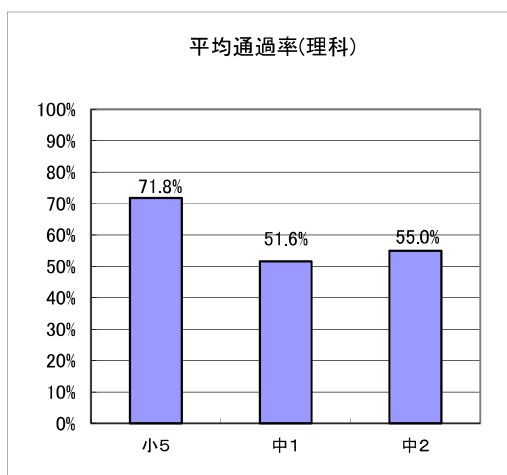
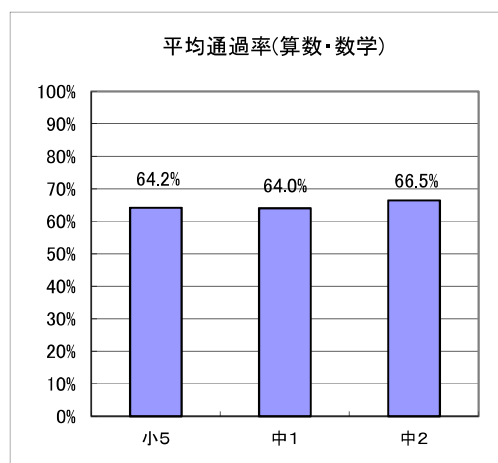
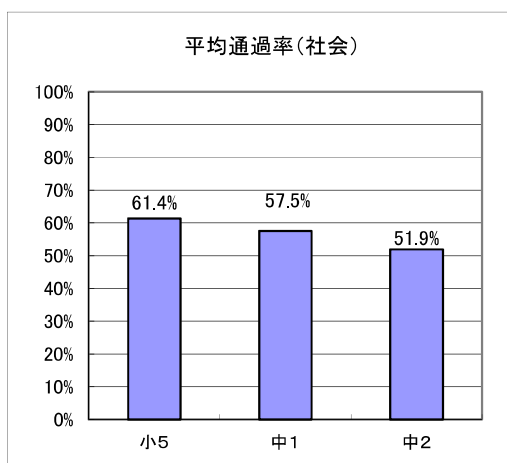
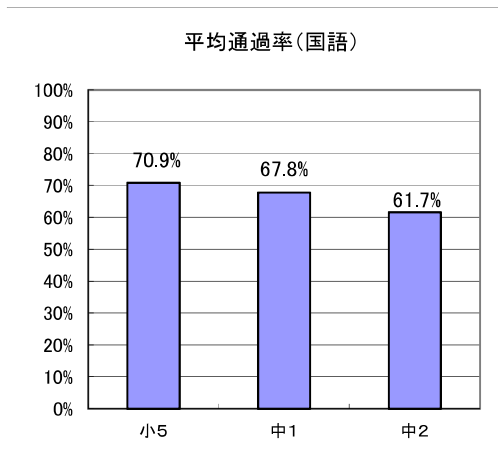
Ⅲ 各教科の結果

1 各教科の全体平均通過率

ここでは、教科ごとに調査実施学年の全体平均通過率を示しており、本県の総合的な学力の定着状況の概要を、教科・学年ごとにみることができる。

(1) 各教科全体の問題数に対して、主として「基礎・基本」に関する問題を7割程度、主として「思考・表現」に関する問題を3割程度で出題した。

(2) 「基礎・基本」及び「思考・表現」の問題ともに、一部の教科・学年において課題が見られるものの、全体的に定着が図られつつあり、改善傾向が確認された。



1 各教科の結果概要

- ※ 通過率は全体及び「基礎・基本」に関する内容、「思考・表現」に関する内容別に示している。
- ※ 各教科の設定通過率は、「基礎・基本」は概ね8割、「思考・表現」は概ね5割としている。

- 「基礎・基本」及び「思考・表現」の問題ともに、一部の教科・学年において課題が見られるものの、全体的に概ね定着が図られつつあり、改善傾向が確認された。
- 自分の考えを書き表したり、事象について説明したりする記述式の問題の無解答率が減少するなど各学校での成果がうかがえる。一方、基礎的・基本的な知識や技能について、定着が不十分な領域や内容も見られる。
- 過去に課題となった内容について、追跡する問題を全教科合わせて75問出題したところ、7割程度の改善が見られるなど、調査結果を基にした取組が進んでいる。一方で、課題が継続している問題もあり、更なる指導法改善の取組も必要である。

【国語】

	基礎・基本	思考・表現	全体
小5	75.8%	61.1%	70.9%
中1	73.6%	59.3%	67.8%
中2	65.6%	53.0%	61.7%

- 小5の「基礎・基本」については概ね定着が図られているが、これまでの諸調査で定着が不十分であったローマ字の読み書きについては、改善が見られなかった。中1・中2の「基礎・基本」については、文章の構成や論の展開、表現の工夫等を正しく理解することに課題がある。
- 「思考・表現」については、全ての学年で無解答率が減少しており、自分の考えをまとめて書くことに一定の成果がうかがえるが、伝えたい事実や事柄が明確に伝わるように書くことや根拠を明確にして自分の考えを具体的に書くことなど、説得力を高めるための表現の工夫に課題が残る。

【社会】

	基礎・基本	思考・表現	全体
小5	62.3%	59.4%	61.4%
中1	64.8%	40.3%	57.5%
中2	57.4%	38.9%	51.9%

- 「基礎・基本」については、各学年とも定着が十分ではない。特に、小5の国土の様子に関する問題、中1の写真を見て該当する気候帯やその分布等を答える問題、中2の時差の計算に関する問題や日本と同緯度・同経度にある国を答える問題など、地理学習の基盤となる知識・理解に関して平均通過率が低いものがあり、課題である。
- 「思考・表現」については、小5は概ね定着しているが、中1・中2は定着が十分ではない。特に、資料を読み取ったことを使って社会的事象の特色や歴史的背景・理由等を説明することに課題が見られる。また、説明記述の問題について、小5では無解答率が1割を超える問題はなくなり、中1・中2でも無解答率が昨年度より低くなるなど、各学校での取組の成果がうかがえる。効果的な取組は継続しつつ、考えを深めたり、筋道を立てたりするために、資料との関連や着目する観点等を意識させ、述べる内容の充実を図りたい。

【算数・数学】

	基礎・基本	思考・表現	全体
小5	70.6%	48.8%	64.2%
中1	70.9%	47.7%	64.0%
中2	73.1%	53.3%	66.5%

- 「基礎・基本」については、全学年、概ね定着はしているが、小5においては、最小公倍数の利用や平均の考えを用いて求める問題、中1においては、自然数の理解、不等式で表すこと、平行移動、簡単な割合を求めることに課題がある。中2においては、引き続き、等式の変形、比例のグラフの判断、反比例の関係を式で表すことに課題がある。
- 「思考・表現」については、各学年とも定着が十分ではない課題が見られる。単位量当たりの大きさの考え方を用いて言葉や数、式を用いて説明することや、図形の軌跡について説明する問題、具体場面を文字式で表し、説明したり、資料から読み取れることを根拠に数値等を用いて説明したりする記述式の問題に課題がある。

【理科】

	基礎・基本	思考・表現	全体
小5	73.9%	67.8%	71.8%
中1	54.5%	46.4%	51.6%
中2	59.8%	43.1%	55.0%

- 「基礎・基本」については、小5の追跡調査である顕微鏡の操作や気象衛星の雲画像と雨量との関係、水の三態変化の問題について、前回は上回るなど、概ね定着が図られている。中1では光合成の仕組み、顕微鏡の基本的な使い方、メスシリンダーを使った物質の体積の求め方などに課題があり、全体的に定着が図られていない。中2では化学変化（分解）の意味、化学変化のモデルでの説明、等圧線の読み方などに課題があり、全体的に定着が図られていない。
- 「思考・表現」については、小5は概ね定着が図られている。中1、中2は無解答率は改善されたが、全体的には定着が図られていない状況である。小5の電流の大きさと扇風機の風の強さとの関連、中1のおんさと身近な物体の音の変化の関係付け、中3の緊急地震速報の届いた地点の推察など、平成27年度全国学力・学習状況調査で課題が見られた、基礎的・基本的な知識・技能を日常生活の場面で活用する問題について、課題が継続している。

【英語】

	基礎・基本	思考・表現	全体
小5	—	—	—
中1	71.3%	67.6%	69.6%
中2	72.3%	39.8%	57.4%

- 「基礎・基本」については、概ね定着が図られているが、中1においては、thisの形容詞的用法を理解して文を作成することや、対話文の流れから状況を判断して〔三人称＋be動詞＋補語〕の疑問文を作ること、中2においては、まとまりのある英文を読んで内容を把握することに課題がある。
- 「思考・表現」については、中1においては、it, they等の代名詞が示す内容に気を付けて英文を読むこと、中2においては、聞き取った情報を再構築して言い換えること、文脈を正確に理解して人物の考えの根拠となる部分を読み取り説明すること、身近なことを説明する英文を書くこと等に課題がある。